

被爆の記憶 “水” “水” “水”

古谷益雄

昭和二十年八月、私は旧制第六高等學校の生徒で、校友とともに勤労動員のため「日本製鋼所広島製作所」に派遣され、手りゅう弾の鑄造作業に従事していた。

八月六日早朝より空襲警報が発令されていたが、月一回の工場休みの日であったので、寮で朝食を済ませ、さらに支給された昼食用の弁当も一緒に食べ、少々腹の虫を治めて、木製の弁当箱を一階の洗面所で洗っていた。八時十分過ぎであったと思う。空襲警報は解除になったが、微かに爆音が聞えるので西の空を見上げる

して一五度位の遙か彼方に見えた。

そして後方に仰角三十度位の所、高度約五百米位だろうか、落下傘が三つ宙に浮いてゆっくり降りて来るのが見えていた。（実際の数は違っていたかもしれないが、目に入ったのは三つであった）

何か珍しいので眺めていると、数秒後、閃光（せんこう）がピンク色にピカッと光ると同時に、垂直に何かが走ったように見えた。熱さを感じた瞬間、轟音（ごうおん）。そして爆風で正面のガラスが全部飛び散った。屋根の瓦は魚のウロコをはいだように飛散した。

我にかえると、顔面と右足の甲より血が流れている。二階から梅田君ら数人が「熱い」と叫び乍ら駆け降りて来た。

立てかけていた弁当箱の蓋は、廊下を越えて部屋の柱に当たって二つに割れていた。

血が止まらないので同僚の久山君と一緒に会社の診療所へ行くため外に出ると、西の空には「もくもく」と雲が上っている。真夏の太陽なのに一面は真っ白く、一面は影になって黒く、今までに見たことのない光景である。後ろを振り返ると寮は木の骨と、むき出しの屋根の板のみである。自分は爆発の瞬間を真正面から見ていた。なのに、ガラスの破片が二つ直撃した程度なのは、窓の外に一本の背丈より少し高い植木があったからだ。そのために助かった。